

背筋皮弁が有効で安全な術式と考えられた。

2. 広背筋皮弁の作成には腰部の脂肪を多く採取し、組織量を増やす必要がある。

3. 拡大乳房切除症例にも広背筋皮弁は皮膚の壊死が少なく醜形を軽減する効果がある。

6) 一期的乳房再建術の手法と適応

三浦 宏二 (がん検診クリニック)
ク三浦外科

胸筋および皮膚浸潤のない Stage I, II 症例81例に、乳腺全切除とリンパ節郭清に続いて広背筋皮弁による一期的乳房再建術を行った。平均手術時間は2時間55分、重篤な合併症および後遺症は認めなかった。1例で腫瘍近傍に局所再発を認めたが、局麻下で切除し得た。アンケートでは、1例を除いた全例が満足もしくは非常に満足と答えている。

この手術法は非常に簡便であり、一般外科医にも十分に可能である。また乳房温存療法が困難な症例にこの手術を行うことにより、80%前後を占める Stage I および II 症例で局所の根治性と美容の両立が可能になる。

II. 主題 乳癌の早期診断について

1) 新潟県における乳がん二次検診施設の現状について

姉崎 静記 (新潟県村上保健所)

新潟県下で、乳がん二次検診を行っている42施設を調査して、現状と今後の望むべき方向性について検討した。

これらの施設は、13の二次医療圏の二次医療機関とはほぼ一致していた。

乳房撮影専用装置を備えている施設は、過去5年間で約2倍の29となり、乳腺エコーのプロープは、軟部組織用のものを使用している施設がほとんどであり、診断機器の整備は順調に経過している。

放射線科医師が常勤している施設は、3割弱あったが、これら医師が乳腺の画像診断に参加している施設は、未だ少数であった。

県内の二次検診施設の診断能力向上のためには、これら施設を指定・公表すべき時期が来ていると思われる。

更に、乳房撮影導入による乳がん検診の実施に向けても、現在の施設の診断力向上のためにも、放射線科医の参加による複数医師の診断体制の整備が望まれる。

2) TO 乳癌症例の検討

武藤 一郎・小山 高宣
高木健太郎・長谷川正樹
佐藤 好信・石川 裕之 (新潟県立中央病院)
岩谷 昭・小川 洋 (外科)

外来初診時、腫瘍を認めなかった TO 症例を検討した。対象は過去18年間で467例中10例(2.1%)であった。主訴は乳頭分泌4例・乳頭皮膚病変3例・乳腺石灰化2例・腫瘍1例の順に多かった。乳頭分泌例の75%は分泌物細胞診で診断された。他の症例の診断には、皮膚あるいは乳腺組織の生検を要した。手術は1例を除き非定型的乳切が行われた。観察期間1~11年で1例に局所再発を認めたが全例健存している。組織学的には浸潤癌が6例・非浸潤癌が4例であった。Tisを除く TO 症例のうち33%にリンパ節転移が、50%に広範な乳管内進展が認められた。また術後2年で局所再発をきたした例があり、治療に際して注意が必要と考えられる。

3) 高速 MRI を使用した MR mammography による乳癌の診断

植松 孝悦・三浦 努
木村 元政・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)
神林智寿子・林 光弘
親松 学・佐藤 信昭
畠山 勝義 (同 第一外科)

目的: MR mammography (MRM) が乳癌の診断にどの程度有用であるか検討する。対象: 96年6月から97年5月まで新潟大学医学部付属病院で MRM を施行した33例、平均年齢51.4(25~80)歳、全例女性。方法: シーメンス社製 MAGNETOM VISION, 専用 BREAST COIL を使用。Gd-DTPA 10 ml を急速静注前に1回、静注後に5回の Dynamic study. Sequence/3D-TurboFLASH. Scan time/1 min. Slice thckn./2-4 m. 結果: MRM を用いた乳癌診断は、質的診断・広がり診断に有用である可能性が示唆された。

4) 非浸潤性乳癌に対する超音波診断の検討

横森 忠紘・家里 裕
小林 功・綿貫 啓 (小千谷総合病院)
徳峰 雅彦・五十嵐清美 (外科)

非浸潤性乳癌の超音波像は、A腫瘍型 mass type, B乳管型 ductal type, C斑点型 mottled type の3型に分類できる。

最近10年間(1987~1996)で術前に超音波検査を施行